

－ 4. 新宿駅西口－



(現在)

江戸時代は、内藤新宿の宿場から離れ、十二社池と熊野神社がある農村地域であったが、1885年の新宿駅開業に伴い、徐々に市街化。さらに鉄道の便を活かした淀橋浄水場が1898年完成。東京における近代水道発祥の地となる。

その後、関東大震災後の市街地拡大などもあり、浄水場の移転が要望され、1932年、浄水場移転と街路計画などを含む都市計画が決定される。

しかし、戦争の影響等により、事業化は戦後になり、1960年副都心構想が都市計画決定され、これに基づき、1965年に浄水場が東村山に移転、1966年西口広場完成、1971年京王プラザホテル開業の後、ビル建設が進み、その後東京都庁の移転などを受け、東京西部の一大ビジネス・商業拠点となる。

－ 5. 白鬚東・西地区－



(東地区概成)



(現在)

白鬚地区は、江戸・明治期は近郊農村地帯であったが、大正期より繊維工場などが立地し、関東大震災後は住工混在の木造密集市街地となり、災害時の脆弱性が指摘されていた。

都は、1969年この地区を含む6地区を「江東再開発基本構想」として位置づけ、不燃高層化するとともに避難広場などを有する防災拠点として整備することを決定。

東地区は1970年代に第1種市街再開発事業として、西地区は80年代に第2種市街地再開発事業として、それぞれ着工し、東地区は既に完成。西地区では現在も一部が施工中。

－ 6. 汐留－



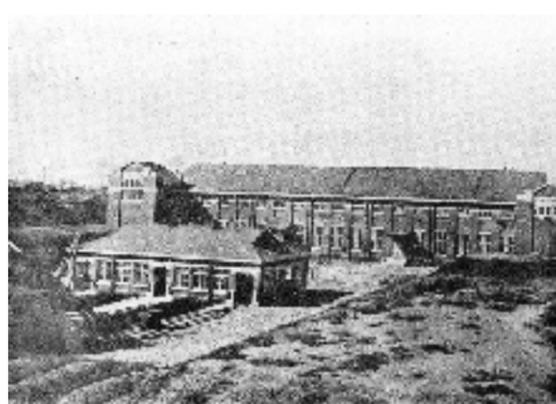
(現在)

江戸時代は、埋め立てによる大名の屋敷地であったが、明治に入り、鉄道開通時に起点となる新橋駅が設置される。その後、東京駅開業に伴い、貨物専用駅となり、東京はじめ関東地方の貨物輸送の拠点として発展。

しかし、1970年代以降鉄道貨物の減少に伴い、遊休化したため、再開発が構想され、90年代に入って区画整理をベースとして官民協働によるプロジェクト化。

2004年には、有カマスメディアなど大手企業が立地する6万人の複合拠点として生まれ変わった。

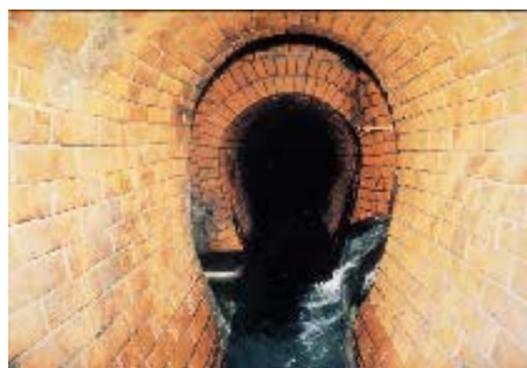
－ 7. 東京の下水道－



三河島ポンプ場（大正11年）
近代下水として日本最初のもの



上記のうち今も残る
水再生センター
平成20年



神田下水
(明治17年完成、現在も使用中)